

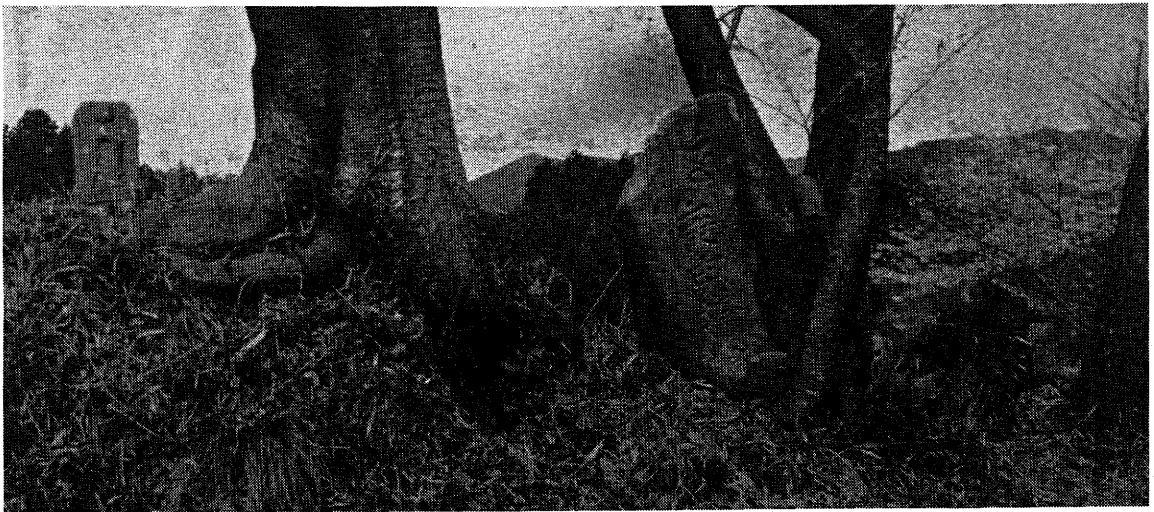
伊とあはれこね

郷土館だより
第17号

五日市町立
発行 五日市町郷土館 東京都西多摩郡五日市町五日市920-1 電話 0425-96-4069 有線4607

異神を囲む祈りと集い

五日市町の石造物 その3. 庚申塔について



はじめに

石造物調査をしていて、庚申塔をみつけたときが一番嬉しい。面妖な神像とユーモラスな猿が刻まれている庚申塔は造形的に面白いばかりでなく、江戸時代の庶民社会に根を張っていた民間信仰—今なら迷信の一言で片付けられてしまうような代物しろものでも、当時の人々の心と暮しを強く拘束していた—を窺う窓口ともなるので二重に魅力がある。

ところで庚申信仰とはどんなものか。沢山の研究、解説書が発刊されているので詳細はそちらにゆずるとして一通りの基礎知識をお取次ぎしよう。(参考書～日本石仏事典・庚申懇話会編、他)

庚申説話の起源は中国伝来(道教)の三尸説さんしに基づくという。これは人間の体内にすむ三尸かのえさるという虫が庚申の日(60日目ごとに廻ってくる)に天に昇り、天の神にそ

小峰峠、桜山

の人の罪を告げ口するからそれを防がないと命が縮む。庚申の夜は身をつつしみ、三尸が脱け出さないように夜通し起きている必要があるというのである。

平安の昔お公卿さんたちは詩歌管弦の遊びなどして庚申の夜を明かしたが、この風習は鎌倉室町期のお武家の間に伝わり、江戸期には一般庶民に伝播、全国的に流行した。その間庚申説話の中に仏教・神道の教えや雑多な習俗が加わり、大変複合的な民間信仰に仕上げられた。江戸期の庶民は庚申講というグループをつくり、庚申日には主尊である青面金剛像しょうめんこんごうの掛軸を掲げ、その前でお勤め、飲食、雑談をして夜を明かした。「話は庚申の晩に」という言葉もあって、庚申の集りは相談ごとや噂話に花が咲く社交の場であり、短調な日常生活の節目として気分転換を計る慰安の場でもあったようである。庚申日の

表1 地区別・年代別庚申塔一覧 ● 像塔 ○ 文字塔 □ 猿田彦

年代	地区	養沢	乙津	戸倉	五日市	小和野	留原	高尾	鶴谷	入野	深沢	三内	横沢	伊奈	山田	網代	計
1690～1719 元禄3～元禄4		●●	●●														5
1720～1749 元禄5～寛延2		●									●				●●		5
1750～1779 寛延3～安永8		●			○			●							●		5
1780～1809 安永9～文化6		○	○			○						○				●	5
1810～1839 文化7～天保10			○○	○	○							○					5
1840～1869 天保11～明治2				○			○							●			4
1870～1899 明治3～明治32				□													1
不詳		●	●●	●	●●	○				○		●	●	●●	●		16
計		6	10	4	6	1	2	1	1	1	1	4	1	3	4	1	46

表2 庚申塔分布図



行事を「庚申待」といったが、この庚申待のグループが自分たちの会合を記念し、一同の延命長寿を祈願し、さらにもろもろの禍をさけ、福を招く為に建てるのが庚申塔である。江戸期の庚申塔の造立は前期にはじまり、中期にピークを迎え、後期に衰頹したという。五日市の場合、表1にみるように塔数もあまり多くなく、そのうえ伊奈石系の像塔は傷みのため年月不詳が多く、大雑把な判断しか下せないが、一応上限が元禄11年(1698)、下限が安政7年(1860)～明治7年の猿田彦塔を除く一で、一般の盛衰と概ね一致する。

庚申の主尊青面金剛について述べると、これは本来伝戸(結核)を防ぐ神(仏教の夜叉)で、室町末期から庚申の神とされ、江戸期に流行をみたという。通常は一面六臂(顔が一つ、腕が六本)で、髪は逆立ち、「どくろ」を頂き、目は三眼で赤く焰え、牙をむき出す忿怒相で、手には宝輪、綱(羂索)、矛(三股叉)、劍、棒などを持っている。一見馬頭観音に似ているが、ずっと恐ろしい。腕・腰・足には大蛇をまきつけ、虎の皮の袴をはき、鬼をふみつけている。まるで、想像力のありつたけをふりしぼって恐ろしさ、奇怪さを演出しているようだ。科学的な医学知識のない昔の人々は伝染病の流行にあえば神仏を拝み、加持祈禱にすがりより他に手がなかったが、その際、薬師如来のようなオーソドックスな慈悲相の仏様だけでは心もとなく、例えば牛頭天王のような妖怪変化的な神様を持ち出してきて、疫病退治を願う。

思うに薬師さまを^{おもて}表の神、タテマエの神とすれば、牛頭天王は裏の神、ホンネの神ということだろう。ホンネの神は支配者向きの神ではなく庶民向きの神である。青面金剛も牛頭天王と同じく庶民サイドから担ぎ出された神のようだ。恐ろしい顔付はもろもろの^{わざわい}災退治用で、心は庶民へのやさしさに満ちている。これを石に刻む — と、

石仏特有の稚拙さからユーモアに転じ、奇怪さが愛嬌ともなる。庚申塔の造立が流行したのは、こんな所にも原因があろう。庚申塔には猿がつきものだが、これは庚申の^{さる}申から出たという。猿がまた一段と愛嬌を添えるが、みざる、きかざる、いわざるの三猿は何やら世俗の知恵を暗に教えているようでもある。

1. 馬頭観音と比較して

五日市町内の庚申塔は目下の調査結果では46基を数え、内訳は像塔27、文字塔17、猿田彦大神(庚申塔の変種)2に分けられる。これを前回の馬頭観音と同じ要領で、地区別、30年刻みの一覧表、分布図を作り表1, 2を得た。結果を整理すると次のようである。

イ 造立期間は元禄から明治に亘るが、造塔数は前半に多い。

ロ 像塔が文字塔より多い。

ハ 像塔が古く、文字塔が新しい。

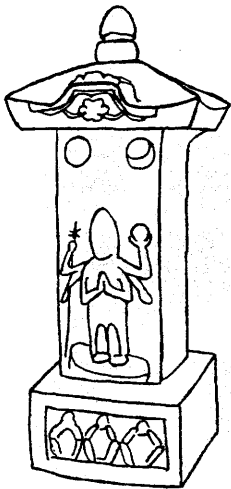
ニ 文字塔は西部地区に多く、東部地区には全くみられない。

このうち、ハ、ニは馬頭観音と共通する。ニは西部に川石が多く、東部が伊奈石の産地という自然条件によるところが多い。(前号で詳述した)

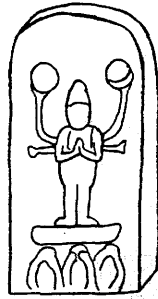
さて庚申と馬頭観音の違いはまづイの造立期間についてみられる。年月不詳の像塔は当然表1の早期に加えられるべきものだから、これを勘案すると庚申塔の盛期は18世紀の前半頃と推定される。馬頭のピークより1世紀近く早く、江戸時代の真只中、一般庶民は閉ざされた社会の中であってまだまだ合理的な考え方など縁遠い時代であった。

次に馬頭と違う点は像塔が多いことで、これはなんともいってもあの怪奇な青面金剛に魔除けの呪力を期待した

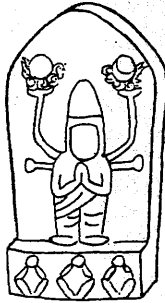
塔型図



イ、笠付角柱型



口、笠なし角柱型



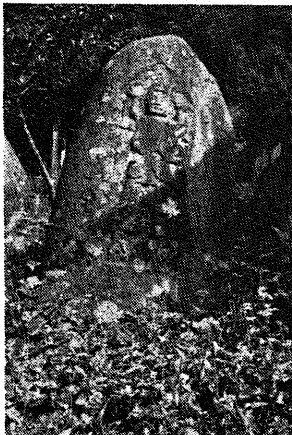
ハ、舟型

からであろう。試みに像塔27の塔型を上図3種に分けてみると、笠付角柱型13、笠なし角柱型(櫛型・山型)6、舟型5、自然石2、破損1(笠付角柱らしい)となり、笠付角柱型が当地の庚申塔の標準型であることがわかる。手間のかかる唐破風笠付の多いことは当地に石工が相当数おったことの証拠ともなる。地区別にみると自然石や舟型はおしなべて西部で、東部地区の庚申は概ね笠付角柱であった。ついでに文字塔17の塔型をみると、自然石13、切石(角柱型)4となる。文字塔の中には梵字や日月を添えたものもあるが、何となく即席の感じで、庚申信仰が終末期に入ったことを窺わせた。

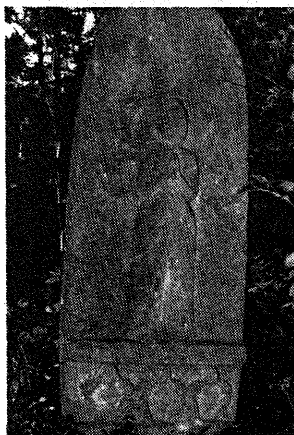
3. 庚申塔のいろいろ

五日市地区の庚申塔で目ぼしいものを選んでみた。説明の順序は
イ.所在地 口.造立年と寸法(タテ×ヨコ×アツミ・cm) ハ.プロフィール

▶A 最も古い庚申塔



▶B 最も大きい舟型庚申塔



▶C 最も小さい庚申塔



2. 銘文からみた塔申塔

次に町内庚申塔46基の銘文(碑に刻まれた文字)をたどってみる。まず造立者名を調べると、集団21、個人4、不明20となる。造立者はただの「講中」としたものが多く、これは当然庚申講中と解される。また「同行何人」もある。中に3基ほど「導師」として僧侶名が刻まれたものがあった。宗教上のプロがリーダーとして参画したものとみえる。

造立の主旨としては「奉造立庚申待供養」の銘文が一番多いが、中に「寒念仏供養」、「女中念仏供養」と書かれたものがあり、庚申と念仏の混淆ぶりがうかがえた。「鎮護郷内、攘二興福」「諸願成就」などという願文もあり、庚申信仰の巾広さをうかがわせたが、数からいえば無銘文のものが最も多く、造立の主旨はこと改めて書くまでもなかったようである。

造立地についてみると、五日市町の旧村16のうち15地区に亘っており、比較的平均に分散されている。現在はそれぞれの地区の寺、堂、神社、クラブ等を集められているが、それでも峠道(表紙写真)や崖上、旧村境にも残されており、悪霊や疫病神を阻止する塞神、道祖神と同じ役も果たしていたことが知られる。

幕末に入ると、五日市地区では庚申塔の造立が止んだ。当時の庚申信仰や庚申講の実態がどのようなものであったか判然としないが、多分に形骸化したものであったろう。明治の御一新を迎え、文明開化の波がおしよせ、暦も変るにつけ、庚申信仰も風化し、辛うじて残った庚申講の習俗もいつしか尻つぼみになっていったと思われる。

イ. 養沢、怒田畑クラブ前

ロ. 元禄11年10月 95×55×31

ハ. 自然石を彫りくぼめた大型像塔、彫りは浅いが、石が硬いので、風化していない。養沢地区にはこの型の地蔵、如意輪観音の墓石が多い。

▶D
笠付角柱塔の代表

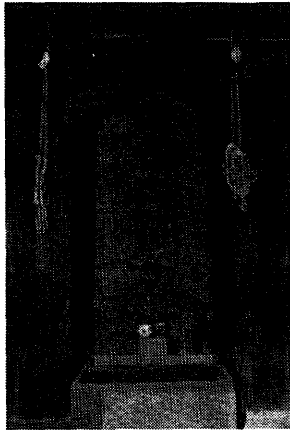


イ. 深沢、穴沢天神社境内

ロ. 享保6年7月 107×43×28

ハ. 深沢村の20人が建てたとある。年代も古い。村の入口に位置し塞神さいのかみの役もつとめている。硬質の砂石を整形して彫った堂々たる優品。

▶E
まだ現役の庚申さま



イ. 三内、小机英夫氏八幡社境内

ロ. 享保9年2月29日 54×26×12

ハ. 松村13家（小机氏は旧姓松村氏）が氏神八幡社で会合を続けた記念の碑。同族結合のシンボル。銘に、「同行十三人」とある。像容可憐。

▶F
猿田彦大神さるたひだしん



イ. 網代、クラブ前

ロ. 寛政5年春 111×29×25(笠巾56)

ハ. 伊奈石。ぼつぼつ欠け始めているが、年代が若いめ辛うじてもっている。塔型、像容ともに標準型。右側面に「女中念佛供養塔」とある。

▶G
文字塔の代表



イ. 伊奈1440、荒井食品店西隣

ロ. 不明 166×75×28

ハ. お籠りできる庚申堂（明治9年築）内に安置されている巨像。伊奈石。毎年8月20日に近い日曜日ひだいらが縁日。伊奈中平地区の人々が奉仕。

▶H
性の神様



イ. 養沢、寺岡荷田子坂

ロ. 安永3年8月 118×28×20(笠巾42)

ハ. 猿田彦は天孫が日向へ降る際の道案内の神。江戸期に入って庚申の神とされた。この塔もよく見ると道標で、右やまみち、左檜原とある。

▶I
和製トートム・ポール



イ. 小和田、広徳寺入口

ロ. 記載なし 115×53×42

ハ. 厚みのある自然石。日月の線刻が丁寧で字も立派であるが無銘。この石は粒子の細かい古生代の砂岩で艶があり、苔も生えにくい。

イ. 乙津1978、庚申坂

ロ. 文政元年11月 105×100×70

ハ. 赤色のチャートひうちいし（燧石）。庚申塔にはときにエッチなものもある。この塔を建てた人はユーモアを解する人らしいが、名前は刻んでない。

イ. 戸倉、星竹ブレーク・モア邸

ロ. 記載なし 180×80×25(推定)

ハ. アクセサリーとして購入されたらしい。文字はない。昭和製か。

日本の古美術に造詣の深い邸主夫妻の嗜好がうかがえる。